か、お釈迦様の誕生日の花祭りなどお祝い事もある。お寺で遊び、身近に感じてもらえたら」と企画したという。

門徒や地域の子ども計約80人が集まり、念仏を唱えたり念珠を作ったりした後、絵本の読み聞かせやゲーム、ヨーヨー釣りなどをして遊んだ。境内は走り回る子どもの笑い声で満たされた。（大矢和世）

## お寺で「こども縁

寺の境内で、射的をして遊ぶ子どもたち

養育里親制度について学ぶ「OHANAカフェ」の様子

## 県里親支援機関「OHANA」（大刀洗町）

すくすく

# 家庭的な環境で成長を

「子が人格を形成する時期、家庭的な環境で信頼感と安心感を育むのが里親」。お茶を傍らに養育里親制度について気軽に学ぶ「OHANAカフェ」の様子だ。県里親支援機関「OHANA」（大刀洗町山隈）が今年から月に1回、筑後地区を中心に各地で開いている。

OHANAは昨年7月、乳児院などを運営する社会福祉法人慈愛会が、日本財団（東京）の助成を得て開設した。親の病気や虐待などの理由で親と暮らせない子どもを預かる里親制度の啓発や、里親をサポートする機関として〝伴走者〟の役割を担う。厚生労働省は2020年度までに全都道府県で里親支援機関を整備するとしているが、まだ公的支援は十分ではない。

「里親が増えれば、子どもが育つ選択肢も増える。専門知識のある私たちと里親が一緒に子どもの成長を考えられたら」とマネジャーの原田三津子さん(54)は話す。ソーシャルワーカー青柳礼奈さん(39)も「児童養護施設の職員も手厚く子どもに関わろうと心がけるけれど、やはり関わる密度は里親の方が濃い」と重要性を語る。

県内（政令市を除く）で養育が必要な子ども745人に対し、里親に委託された子どもは約20%にとどまる(17年度)。

OHANAとはハワイの言葉で「いろいろな家族」の意味。施設での集団生活ではなく、家庭のような生活へ。いろいろな家族の形を増やせるよう、啓発や研修活動を続ける。（大矢和世）

県里親支援機関OHANAの外観。里親の相談や研修の拠点になっている

「本人の声を聴く会」で意見発表をする女性

障害者と家族でつくる「福岡市手をつなぐ育成会保護者会」（約400世帯）が毎年開催。20代～50代の6人の訴えに、家族や支援者ら約90人が耳を傾けた。

集会は「本人の声を聴く会」。冒頭、下山いわ子会

しい人のための就労継続支援A型事業で公園清掃の仕事をする山崎順子さん(51)は「私の伝えたいこと」のテーマで発表。「ごみ拾い、トイレ掃除、ベンチ拭きをしています。コンビニの袋や弁当、たばこの吸い殻もよく落ちています。トイレ

大牟田市動
からも長く存
め、市民にで
ー。10人余り
が25日夜に動
り、飼育員を
を開いた。11
を舞台にした
た映画「いの
のちスケッ
チ」が公開さ
った人たちに
な盛り上がり
たくない」と
がある▼「動
える動物園」
セプトをどう
につなげるか